

一人話りの巧みさを生み出す仮想的相互行為

—教育系 YouTuber によるセリフ発話の観察から—

石田七望(立命館大学学部生) 岡本雅史(立命館大学)

1. はじめに

動画共有プラットフォームの YouTube では、日常生活で役立つ知識や経験などを配信する「教育系 YouTuber」が近年人気を博している。YouTube 番組は、動画を配信し、それを不特定多数の人が視聴するという形態であり、一見すると、動画の配信者から視聴者に向けての一方向の情報伝達であるように思われる。しかし実際には、語り手が自身と異なる人物のセリフとして聞かれる発話をし、その人物と語り手との、もしくは異なる人物同士の疑似的な相互行為が生み出されることがある。この仮想的相互行為は YouTube 番組における一人語りの中にもしばしば見られ、視聴者を引き込む要素の一つであると考えられる。

本研究では、語り手が別の人物を演じ、それに対して反応・言及することで仮想的相互行為を行う場面に注目し、それが語りの中で果たす役割について考察した。その結果、語り手は〈現実の空間〉と〈仮想的な空間〉を行き来しながら、聞き手からの反論が予想される場面や、例え話をする場面において語りの中に様々な人物のセリフを取り入れ、巧みな語りを構築していることが明らかとなった。

2. 関連研究

2.1 仮想的相互行為

Pascual(2014)は、実際には起こっていない架空のやりとりを、話し手が談話の中に導入することを「仮想的相互行為 (fictive interaction)」と名付けた。それらは実際の出来事と直接対応するわけではないが、言語や思考、行動のニュアンスを他の参加者が理解するのに役立つとされる。Spreadbury(2022)は、英語圏の YouTube で仮想会話形式のコメントが見られる点について分析し、動画に対するコメントを、仮想的相互行為を取り入れた実演形式にすることにより、そのコメントを見た人に具体的な想像を促す効果があると指摘した。さらに岡本・津田(2018)は、漫談においてみられる仮想的相互行為について、引用標識に着目した研究を行った。その結果、漫談は〈観客に向かって直接語る場〉とストーリーの中に登場する〈仮想的対話場面〉を行き来させる構造を有していることを明らかにした。また、仮想的な人物の参入によって、二者間の対話を第三者に見せる「オープンコミュニケーション(岡本ら, 2008)」がなりたっていることも同時に示された。

2.2 引用とセリフ発話

本研究と関連性の高い「引用」については、様々な研究がなされている。話法と統語論から引用を定義したもの(藤田, 2000)を始め、直接的引用と間接的引用の使い分けについて論じたもの(山口, 2005)、日本語の引用標識の多様さを示したもの(山口, 2009)、選挙演説を対象に、引用標識のない「ゼロ型引用表現」が使われる目的を観察したもの(大久保, 2013)などがある。藤田(2000: 6)によると、引用はどこかにあったとみなすことができるものを再現しようとする形である。

続いて、会話の中で見られる「演技」についての研究を示す。西阪(2008: 275)では、演技は「相互行為空間を、いわば「舞台」として、「想像の空間」として構造化する」とされている。臼田(2019)は、会話の中で見られる「演技的な発話」として観察し、それにより達成される行為と、会話の場への影響を考察した。その結果、演技に先行する発話が、その後演技に類するなんらかのふるまいがなされることを予測可能にすることや、演技が関心を引き付けることで、それまで発話しなかった参加者にも発言を促すことなどが示された。

山本(2013)は、言語的な標識や発話の音調などによって「自らの声とは異なる」ことが示される発話を「セリフ発話」と呼び、そのうち物語を知らないはずの受け手が「セリフ発話」で参入する現象を観察した。その結果、物語の内容と演技により再現される活動を結び付け、物語を理解したことを示すことや、セリフ発話が適切な位置に置かれることで、物語を語るという活動自体の価値を引き上げることを示した。

2.3 関連研究のまとめ

これまでのセリフ発話や演技的な発話の研究では、複数人の会話を観察したものが中心であり、セリフ発話が一人語りの中でどのように用いられるかについて研究されたものはあまりない。しかし、一人語りの中でも、語り手自身が他者を演じ、それに応答することで相互行為を生み出し、複数人の会話で用いられるセリフ発話と同様の、またはそれ以上の効果が見られることも考えられる。そこで本研究では、一人語りで構成される YouTube 番組を対象に、語り手によってどのような仮想的相互行為が構築されるのかとその効果について考察する。

3. 調査方法

3.1 分析データ

分析対象としたのは、お笑いタレントの中田敦彦が運営する YouTube 番組「中田敦彦の YouTube 大学¹」である。歴史、経済、現代社会など、様々な分野の授業が配信されており、教育系 YouTuber の中でも登録者数が 500 万人を超えており（2024 年 11 月時点）、圧倒的な人気を誇っている。データとしては、初めから終わりまで中田の一人語りで構成されている動画の中から、授業テーマの異なる 3 本の動画を選択した（表 1）。これらの動画の中で、最初と最後の予告や宣伝を除いた部分を分析対象とする。

表 1：データ情報

番号	動画タイトル	公開年月日	時間
[1]	平家物語①日本人なら知っておくべき平氏と源氏の戦い ²	2020 年 10 月 3 日	47 分 40 秒
[2]	食べてはいけないもの①他のメディアでは言えない病気になる食べ物とは? ³	2021 年 6 月 12 日	37 分 54 秒
[3]	消費税は何に使われているのか①消費税は法人税減税分の穴埋めに使われているのか? ⁴	2022 年 6 月 28 日	23 分 53 秒

3.2 分析方法

まずデータを文字起こしした。その後、セリフ発話部分について、セリフの発話者（語り手は誰を演じているのか）によって分類した。そして、その発話の特徴と位置（前後の文脈との関係性）に着目し、語り手への効果を考察した。上述した山本(2013)では、セリフ発話は語り手と受け手のどちらも行いうるものとした上で、語り手が行うものは演技的な発話という説明にとどめ、受け手が行うもののみをセリフ発話としているが、本研究では語り手が行うものも「セリフ発話」と呼ぶこととする。また、「どこかにあったとみなすことができるもの」（藤田,2000:6）という引用の特徴と、「相互行為空間を想像の空間として構造化する」（西阪,2008:275）という演技の特徴をあわせ持った発話をセリフ発話とみなすこととした。そしてそれ以外の発話を「地の発話」と呼ぶこととする。

4. 結果と考察

分析の結果、セリフ発話によって生じる仮想的相互行為には、(I) 内部型仮想的相互行為、(II) 越境型仮想的相互行為、の二種類があることが明らかとなった。なお以下では、囲み部分がセリフ発話箇所であり、二重下線部がセリフ発話に対する語り手の反応である。

4.1 内部型仮想的相互行為

断片 1：データ[1](11:06-11:39)

¹ 「中田敦彦の YouTube 大学」 <https://www.youtube.com/@NKTOfficial>

² 「中田敦彦の YouTube 大学（平家物語①日本人なら知っておくべき平氏と源氏の戦い）」

<https://youtu.be/Vlr3qEKVYNI?si=tJU9CPbwdQRWMMQz>（最終閲覧日 2024 年 12 月 4 日）

³ 「中田敦彦の YouTube 大学（食べてはいけないもの①他のメディアでは言えない病気になる食べ物とは?）」

<https://youtu.be/UKBWar3TTD4?si=BoPt7NOVVP2x0qLR>（最終閲覧日 2024 年 12 月 4 日）

⁴ 「中田敦彦の YouTube 大学（消費税は何に使われているのか①消費税は法人税減税分の穴埋めに使われているのか?）」

<https://youtu.be/-pog3lnFfGY?si=ywQhzTs5ii9w20h>（最終閲覧日 2024 年 12 月 4 日）

a おい忠盛、おい忠盛、おい忠盛、貴様みたいな子汚い虫けらが上がっている場所ではない。 b 私はこの御所に上がることを認められています。 a うるさい。ボコりますよ。ボコりますよ。こうなったときですね。 b ふう、私も武士の端くれですからそのように暴力を振るわれて倒れたとなったら部下たちに示しがつかないんでね。その喧嘩買わせてもらいますよ。

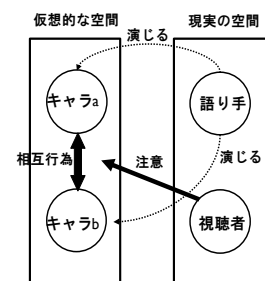


図 1：内部型仮想的相互行為

断片 1 では囲み部分 a と囲み部分 b の会話として語り手の発話を聞くことができる。内部型仮想的相互行為は、仮想的な空間にいる人物同士による相互行為が生み出されている場面を創出しており（図 1）、必要に応じてキャラクターの数を増やしたり、時には地の発話を間に挟まずキャラクター同士のやりとりをしたりと、聞き手に物語の具体的な想像を促していた。

4.2 越境型仮想的相互行為

内部型では、仮想的な空間にいる人物同士による相互行為が見られることを示した。一方で、越境型は仮想的な空間にいる人物と現実の空間にいる語り手とで相互行為が行われる場面を指す。越境型仮想的相互行為を生み出すセリフ発話には、(i) 視聴者の声として聞かれる発話、(ii) 語りの中のキャラクターの声として聞かれる発話、(iii) 語り手自身が過去に抱いていた本音をもとにした発話、の 3 つのタイプが観察された。

4.2.1 視聴者の声

断片 2 は、日本人の糖尿病患者数が増加している原因について解説した後、どのような生活習慣がその要因となっているのかについての解説に移行する場面において、視聴者の声として聞かれる発話が見られた場面である。

断片 2：データ[2] (13:07-13:54)

ではそんな悲惨な現状大括りで捉えていただいた上で、じゃあちょっとね、皆さんのこの生活のレベルにこうフィットさせましょうよ、生活チェックいきましょ。一体何がダメなのということでございます。食べてはいけないものっていうのをまず教えるよ中田と。俺それだけ聞きてえんだよ。食べちゃいけないもんさ教えてくれりゃーよお、もうそれさ食べなければ他のもんバクバク食ってよお、寝てんだからよ。早く教えるよ中田。何が貧困率が上がってるとかめいんだよ、俺の俺の生活変わんねえんだから。早く食べちゃいけないもん教える俺の命だけが大事だ。落ち着いてください。チェックしますから始めましょう。

ここでは、丁寧な口調からぞんざいな言葉遣いに変化していることや、「俺」という一人称が使われていることなどから、異なる人物を演じていることが示される。ここでの仮想的相互行為の役割として、問題の複雑さを伝えることが挙げられる。セリフ発話内では、背景的知识には関心がなく、「食べてはいけないもの」だけをすぐさま知りたがっている視聴者が演じられていた。語り手は多くの視聴者が同じ気持ちであることを想定していると考えられ、それでもやはり、本題に入る前に丁寧な確認が必要であることを伝えている。それにより、取り上げている問題が一筋縄ではいかないことを強調している。それと同時に、食べてはいけないものを単純に紹介する授業ではなく、様々な知識との関連性が解説されることを予感させ、その後の解説に期待を持たせる。

視聴者の声として聞かれるセリフ発話では、予想される反論を予め潰しておき、語りの説得力を高める役割や、先を知りたがる視聴者の気持ちを落ち着かせ、語りの進め方をコントロールする役割があると考えられる。このような役割は、山本 (2013) で示された、聞き手のセリフ発話によって物語自体の価値が高まるという効果と類似しているといえる。

4.2.2 キャラクターの声

断片 3 は、ダイエット食品として認知されているゼロカロリー飲料が、実は危険なものであるということについて解説する場面、キャラクターの声として聞かれる発話が見られた場面である。

断片 3：データ[2] (18:59-19:23)

みんな気をつけるでしょ。おい、ボロ儲けできる投資話があるんだけどさあ、君だけに教えるよって言う人にさあ、あなた番号渡す？ 渡さないよね。突如現れたボロ儲けの投資があるからあなただけに教えるってそれポンジスキームやからね、ポンジスキームと言われる伝統的な詐欺手法だから、絶対にその資金は返ってこないから。

この場面では、セリフ発話直前の「みんな気をつけるでしょ」という発話に「何に」に当たる部分がなく、気を付けるべき対象が示されていない。この言い回しは、その後に「何に」に当たる部分を語ることを予告する。そしてこの場面では、

フレームの変化が表現されていることも特徴的である。セリフ発話直前の発話「気を付けるでしょ」の後、語り手は一度画面から外れる。そしてセリフ発話の開始部「おい」という発話をしながら、役として再び画面に登場する。これにより、仮想的な場面に移行することが示されている。ここでは、ゼロカロリー食品を詐欺に喩える目的で仮想的相互行為が用いられている。ぼろ儲けできる投資を自分だけに教えてくれるというあり得ない投資話を通して、甘くて美味しい飲料を飲んでも太らないというありえない話に騙されていることを視聴者に気づかせようとしていると考えられる。

キャラクターの声として聞かれるセリフ発話では、解説したい事象を別の事象に喩えるときや、複雑な事象が要するに何を意味しているのかを簡潔に伝えたいときに使われ、聞き手の理解を高めることが示唆された。

4.2.3 過去の語り手の声

断片4は、源氏物語が紫式部によって描かれた書物であるのに対し、平家物語が書物ではなく琵琶法師によって口頭で語り継がれてきたことを述べる場面で、語り手自身が過去に思っていたことを基にした発話が見られた場面である。

断片4：データ[1] (02:53-03:43)

言ったらまあ琵琶法師っていうのはね、その語り、物語をです、喋って喋って伝える。私教科書で読んでね、琵琶法師か。そんな奴いる？物語全部一人でしゃべるみたいなそんな奴いる？何そいつの職業と思っただけあのまぼなってます。はい。なんで物語全部しゃべるのそいつがって、なんかあるだろ手段がって思ったら喋っちゃうんですよねこれがね。だから気持ちわかるようになってきたという

過去に教科書を読んだときに思ったことであると事前に示した後、セリフ発話直前の「教科書読んでね」の発話中から、教科書を開くようなしぐさが始まり、体を少し後ろに下げ、「琵琶法師か」という発話から回想が始まる。ここでは、物語を口頭で伝えるというにわかには信じがたい琵琶法師に対し、「そいつ」「そんな奴」という指示語を用いて散々馬鹿にした後、それと同じような存在に自分なりにかけているという発言で笑いを生んでいる。さらに、かつての自分のように、視聴者も琵琶法師の存在を信じがたいだろうと予想し、語り手自身も過去には同じように思っていたことを伝えることで、自身と視聴者との距離を近づけるという効果も考えられる。

過去の語り手の声を用いたセリフ発話では、自分の発言に自分でツッコむという構造自体がユーモアを生み出すことや、語り手と視聴者の心的距離を近づける役割があることが示唆された。

このように、越境型仮想的相互行為では、仮想的な空間において語り手が異なる人物を演じて発話し、それを受けて地の発話で応答する。その相互行為を視聴者が見るという構造である(図2)。

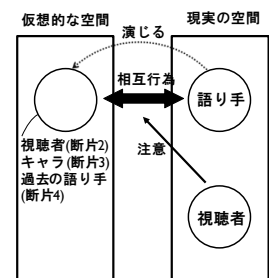


図2：越境型仮想的相互行為

5. おわりに

一人語りで構成される教育系 YouTube 番組で用いられるセリフ発話に着目して研究を行った結果、語り手は地の発話として解説を進めつつ、視聴者の声、キャラクターの声、自身の過去の声セリフ発話として取り入れ、現実の空間と仮想的な空間を行き来しながら仮想的相互行為を生み出していることが明らかになった。語り手から聞き手に向けての一方方向の情報伝達に見える一人語りにおいて、セリフ発話を用いて仮想的相互行為を生み出すことが、聞き手の興味を惹きつける巧みな語りを構成するため一つの要素であると言えよう。

参考文献

- 藤田保幸 (2000). 国語引用構文の研究 和泉書院
 西阪仰 (2008). 分散する身体—エスノメソドロジー的相互行為分析の展開 勁草書房
 岡本雅史・大庭真人・榎本美香・飯田仁 (2008). 対話型教示エージェントモデル構築に向けた漫才対話のマルチモーダル分析 知能と情報 (日本知能情報フュージ学会誌), 20(4), 529-539.
 岡本雅史・津田明日香 (2018). 漫談における仮想的会話の導入—独話の相互行為性の解明に向けて 社会言語科学会第41回大会発表論文集, 246-249.
 大久保加奈子 (2013). 共有される他者のことば—選挙演説に用いられるゼロ型引用表現の分析 社会言語科学, 16(1), 127-138.
 Pascual, E. (2014). *Fictive Interaction: The conversation frame in thought, language, and discourse*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
 Spreadbury, Ash L. (2022). Fictive Interaction in humorous YouTube comments: a preliminary investigation 藝文研究, 122, 205(40)-218(27).
 臼田泰如 (2019). 会話における演技に関する会話分析的研究 京都大学大学院人間・環境学研究科博士論文.
 山口治彦 (2005). 直接語法は有標の構造である—対話的コンテクストにおける語法の実態 神戸外大論叢, 56(2), 83-110.
 山口治彦 (2009). 明晰な引用, しなやかな引用: 語法の日英対照研究 くるしお出版.
 山本真理 (2013). 物語の受け手によるセリフ発話—物語の相互行為的展開 社会言語科学, 16(1), 139-159.